

授業、探究、地域連携…
学びを進化させる

— 今できること、今だからこゝろ考えたいこと

地域連携

浦崎太郎 (大正大学地域創生学部 教授)

地域社会や保護者との文脈の共有や関係性の醸成。
それこそコロナ禍における「学びの土壌」づくりの第一歩

「これまでは時間がかかったが
今ならば即、文脈を共有できる

なぜ「地域連携」が必要なのか。それは、学校内だけで学びは完結しないから。また、自ら課題を発見し、問いを立てるためには現場で感じる必要があるからです。生徒が「学びを深めていきたい」と感じたとき、学校という器は狭すぎます。学びのフィールドを地域に広げること、社会は多様であり、今の学びは未来へつながっていくことなどを実感し、それがエネルギー源となって、教科の学びを自ら進める「自走性」につながるのだと思います。

とはいえ、地域社会との連携やそこを舞台にした探究学習は、一朝一夕にできるものではありません。「そんなことよりも受験指導だ」という声が、管

理職や保護者にも根強くあるなか、イノベーター的な働きをする先生がいたとしても、組織的な動きにつなげるにはある程度の年月が必要でした。なぜなら、地域の方々と認識や文脈を共有することが難しかったから。例えば「地域課題の解決」といっても、「高校生に何ができるの?」と思われる「資質・能力の育成」やそのための「質・イメージが伝わりづらかったり。しかし、今は違います。「地域医療が崩壊寸前」「家計が困窮し、進学さえままならない」といった事態が目前で起こっているとき、年齢・職業を問わず、当事者意識をもっていない人はいないはず。そうしたなか、例えば、「このような危機や社会課題をどうすれば乗り越えられるかを自分ごととして

捉え、さまざまな専門家と協力しながら、行動に移すことができる人物こそ『地域人材』なのでは」と語れば、すつと心に入っていくと思うのです。

**地域やPTAの力を借りた
「学びの土壌づくり」を**

学校の中心が教科の授業であることは間違いありません。ただ、その前提として、クラスづくり、部活動、生徒指導に代表される、集団における関係性を醸成したり、落ち着いた環境を整えたりする「学びの土壌」づくりが欠かせません。それがあつて初めて、授業が安定的に成り立つわけです。

けれど、休校や分散登校によって、この土壌づくりに大きな制約が生じました。ダメージは地味に効いてきて、恐らく相当数の生徒が今後、学びか

ら脱落してしまうのではと危惧しています。学校がそうした機能を十分に果たせないとしたら、地域の力を借りるしかありません。そこに、学びに向かわせるサポートがあるかないかが、今まで以上に問われると思います。

その第一歩が、前述したように、地域・家庭と学校が文脈を共有することです。「こうした問題を乗り越える力を付けることが学ぶ意味。それは知識を詰め込むのではなく、活用できてこそだよ」といったことを対話を通じて共有し、それぞれが子どもたちにも語る。そうしたハーモニーを奏でることで、生徒が安心して学びに向かう土壌を学校内外でつくっていくのです。

それを一歩進めるために、例えばPTAを活用してはどうでしょう。地域の大人が、今どんな思いで戦っているの



教師でしか果たせない役割。
それは生徒を、社会とつなぎ、
教科とつなぎ、進路とつなぐこと

うらさき・たろう ● 1965年生まれ。広島大学大学院教育学研究科 博士前期課程修了後、郷里の岐阜県で高校教員に。県立恵那高校、岐阜高校、羽島北高校勤務の間、人事交流で中学校勤務を経験し、総合学習を支援するNPO設立に参画。4年勤務した岐阜県博物館でアウトリーチ事業などの社会教育に取り組む。可児高校では、地域課題解決型キャリア教育の普及に尽力。中央教育審議会生涯学習部会学校地域協働部会専門委員(2015~17年)。17年より大正大学地域構想研究所 教授、20年より同地域創生学部 教授。

かを語りかけてもらうのです。「社会

人講話」のようにリアルに集まること

を前提とすると、オペレーションを考

えるだけでも気が重くなりますが、デ

ジタルツールが身近になってきた今なら、

オンライン上にライブラリーをつくるこ

とも容易です。生徒が「この人の話を

もっと聞きたい」と思ったならZoomな

どを使って、コンタクトをとることもで

きるでしょう。

地域連携という点、何から始めてい

いか戸惑うかもしれませんが、学校が

ファーストコンタクトをとりやすいのが

P.T.A. 校内の然るべき部署で議論し

たうえて管理職に提案すれば、通ら

ない話ではないですし、仮にP.T.A活

動が硬直化していたとしても、今なら

文脈を共有できると思うのです。

オンラインによって広がる 地域連携の可能性

オンラインに対する私の認識はこの
数カ月で変わりました。以前は、「直

接会うことでしか伝わらない思いや、

現場でしか立てられない問いがある」

と頑なに考えていました。もちろん、

リアルであることの意味は依然として

大きいものの、今は、多くの人同様、「意

外とオンラインもいけるじゃん」と感じ

るようになりました。特に地方の高校

の場合、時間もお金もかかった遠方の

人たちとの触れ合いが、オンラインで

は制約なくできるわけです。これまで

探究に二の足を踏んでいた生徒にとっ

ては敷居がぐっと低くなりましたし、

以前から積極的に探究活動を進めて

きた生徒が、その感覚をもったままオ

ンラインを活用しだしたならば、トビ

ラは世界に開かれていくわけで、可能

性は飛躍的に広がると思います。

今こそ教科の本質や学ぶ意義を 生徒に全力で語るべき

コロナ禍によって浮き彫りになったさ

まざまな社会課題に直面した生徒の

意識は変わりました。また、休校期

間中、ラーニング・コミュニティ(主体的

な学習共同体)などを通じて学んだ生

徒は驚くほど成長しています。そう

したなか、旧来のような受験指導中
心の授業に納得するわけがありません。
今こそ、「この教科は何につながって
いるのか」という、その教科の本質や
学ぶ意義を生徒に語るべきです。

世間から誤解されがちですが、進
学校の先生方も、受験指導だけして
きたわけではありませんよね。私も岐
阜県の進学校勤務時、「この問題が解
けた先にこそ課題発見・解決がある。

それ抜きで社会貢献などないですよ
ね」などと、教科の価値について語る同
僚の想いを常々聞いてきました。「この
教科の学びの先にはこういうことがあ
るんだ」と誇りと熱量をもって伝える
ならば、仮に画面を通したとしても、
心に響かないわけがありません。

教師でしか果たせない役割とはなん
でしょう。私は、生徒を「社会とつなぐ」
「教科とつなぐ」「進路とつなぐ」こと
だと考えています。生徒が日々感じて
いる「こんなことを知りたい」「こんな
人生を実現したい」という思いには、

さまざまな教科の学びが紐づいている
わけです。それらを縦横につないでい
くことで、次の学びへ向かう意欲とす
る。そうした役目を果たせるのは教
師しかいないし、それこそ学校教育の
価値だと思えます。今は、そういう

学びの本質を語ることができると千載
一遇のチャンスではないでしょうか。